話を名号の験益に戻すと、それは前述のような祐天の行蹟の積み重ねによる信者の仰信にほかならない。祐天がその仰信を手に入れることができたのは、一度は檀林主になれるまでの地位を手に入れたにもかかわらず隠遁したという事実であり、名利を捨てた真の姿を草庵という場所で示したことによるのであろう。もちろん全く名のない僧であればこうはいかなかったかもしれない。累得脱の話がすでに版本として発刊され、増上寺の学頭という栄職を捨てたということも相まって、いっきに祐天の道名が高まっていったことによるものであると想像できるのである。

そして、この祐天の名と行蹟が確実に伝承されているからこそ、現在も多くの名号が伝えられているのである。

●第二節　祐天の目指したもの

第一項　寺院の復興と不断念仏道場の建立

祐天は、名号の書写によって得た布施や檀林主となってから得た金銭を、咸く寺院の復興に費やしたと言って良いであろう。

東大寺の復興に始まり、菩提寺をはじめとする郷里の諸寺院、そして関東の有縁の寺院の

復興・護持に力を注いだことは伝記にあるとおりである。鎌倉の大仏・専称院・良忠寺・最勝院・名越檀林専称寺・館林善導寺など、今でもその足跡をたどることができる。また、祐天の信者を通じて間接的に関与した寺院も少なくない。これらもまだまだ未調査であり、今後発掘すべき課題である。

これらの事績からわかることは、たとえ将軍家からの拝領物であっても自分の手元には置かなかったということである。それは祐天が個人で持っていても念仏門の繁栄にはつながらないと考えた証しではなかろうか。この布施の精神は生涯持ち続けていたと考えられる。

特に隠遁中に内藤家と言う権力者を媒介に最勝院を復興するだけの財力と道名を持っていたことに改めて驚きを感じるのである。本来の隠遁ではなく、庶民との接点を常に保ち草庵に住んだところに、祐天の教化の姿勢が見てとれる。

寺院の復興は祐天の布施行の実践であり、念仏を広め絶やさないことへの偉大なる配慮であったのである。そして、新寺建立に規制があった時代の一つの夢として不断念仏道場の建立があったのであろう。その夢は祐海に託され、祐天寺の建立につながったのである。

善導寺・法然寺や良忠寺といった祖師以外で寺号となった名僧はそれほど多くはない。それは弟子祐海の希望とはいえ、庶民の信仰から将軍家まで幅広い信仰を集めた祐天であったからできたのであり、その遺徳は祖師に並ぶと言わねばならない。

祐天寺は明治二十七年、軍事下請工場と見られる会社に境内地を貸与していたとき、その

工場からの失火により本堂・書院を焼失した（「東京朝日新聞」明治二十七年九月十四日）。残念なことであるが、そのほかの諸堂は現在も残り祐天の遺徳を偲ばせている。

第二項　庶民の救済

祐天は苦しむ農民を取り締まる立場にあった、いわば中間管理職の家に生まれたのではないかと推定した。また親類に出家者も多かった。そんな中で伯父や両親の言葉に耳を傾け、純粋な気持ちで出家したのではなかろうか。すなわち、漠然とながらも苦しんでいる人々を救えるような立派な僧となるようにと言われていたことであろう。出家してからは、ひたすら檀通上人を師と仰ぎ、臨終のときまで離れることはなかった。臨終のときは独り祈祷堂にこもって念仏したぐらいの一本気な性格だった。そして、医者も十分に人を救えない時代、まして田舎にどれほどの医者がいたであろうか。現実に苦しんでいる人が寺の門戸をたたき相談にきたに違いない。随身として檀林で勉強を進めていた祐天ではあったが、現実に人を救わなければ何にもならないと考えていたのであろう。その証拠には、累得脱の話にしても、檀林には大勢の僧侶がいたことには間違いがない。そんな中なぜ随身の祐天が出かけていったのか。むしろその檀林の末寺の所化がいたのであるから、近所の出家僧が頼まれて当然ではなかったのか。しかし、現実には祐天が出かけ救済を果たしたのである。祐天は黙って見